

---

# 最高のタイガース = プレイヤー

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最高のタイガースIIプレイヤー

### 【Nコード】

N3699D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

低迷にあげく阪神にやって来たのは誰もが期待していなかった鈍足の助っ人であった。しかしその彼が奇跡を起こす。あのバースのお話です。まさに神様仏様バース様でした。

## 第一章

最高のタイガースプレイヤー

まああまり期待はしていなかった。殆どの人間が。

「また外れや」

「そやそや」

こんな調子であつた。この球団の助っ人はまああまり期待されない。意外と活躍した助っ人も多いのだがファンはこう言うのである。球団もまた。何か妙な宣伝をしていた。

「バスじゃありませんから」

「バスです」

本名はバスである。しかし何故かバスと表記していたのだ。

これには理由がある。この球団、はつきり書いてしまえば阪神はグループにバス会社も持っている。それで彼が打たないと阪神バスがどうとか言われたりマスコミにバス渋滞だのそんなことを書かれることを縁起でもない嫌ったのだ。実に鉄道会社らしい話である。こうしてこのバスという助っ人が決まった。髭を生やした白人であつた。

「あいつどうなんやろ」

「あかで、あいつ」

こういう声が聞こえる。それにはれっきとした理由もあつた。

「あいつ子供の頃足骨折したらしいわ」

「ホンマか？」

「ああ、そうらしいで」

これは本当のことだった。実際に彼は幼い頃に両脚を複雑骨折している。その為脚が非常に遅かった。つまり守りに支障が出る。

「確か外野やったな」

「ファーストも守れるらしいけれどな」

だが外野手に登録されている。これを知ったファン達はさらに不

安になった。

「甲子園の外野、大丈夫か？」

「そんなのであの広いグラウンドを」

「まああかんやろ」

またこう言われた。

「どうせまたスカヤ」

「そやな」

こう言い合う。とにかくマスコミはやたらと宣伝するがファンの多くは期待していなかった。この球団のファンは昔からこういうところがある。熱狂的なのは有名だが妙なところで醒めているのである。そうでなければこのチームは中々応援できないのも確かだ。

そうして開幕になった。やはり彼の守備は悪かった。守備範囲が狭いのだ。

「わかつてたけれど」

「これは」

一塁側の阪神ファン達も呆れた。守れないに等しかった。

「あかんやろ」

「しかも打たへんやないか」

そちらもさつぱりであった。特に速球に弱いのだ。

「スカヤな」

「ああ、スカヤ」

皆早々と匙を投げた。六月の中頃には帰るだろうと思っていたところだ。

六月になった。次第に守備位置もファーストになるようになって守備も気にならなくなったがそれ以上にバッティングが。絶妙に当たりだしたのだ。

「な、何や！？」

「これは一体」

皆打ちだした彼に驚きを隠せない。彼は次々とヒットにホームランを打ちだしたのだ。しかも勝負強い。これには誰もが驚いた。

「嘘やる」

「また打ったで」

巨人戦でもそれは同じだった。ここぞという場面で打つのだ。彼は阪神になくてはならない存在になっていた。六月になって別人のようになだ。

「いつも六月までは駄目なんだ」

それが彼の言葉であつた。

「けれど六月になってからはいつもこうなんだ」

そういうことであつた。それ以降彼は打ちまくつた。まさに助っ人であつた。

「頼りにしてええかな」

「ええんちゃうか？」

ファン達は今の彼を見て言う。丁度夏場だった。阪神限定の辛い期間である。甲子園を高校野球に貸し出す為にロードになる。人はこれを『地獄のロード』と呼ぶ。ここで阪神はいつも負けるのである。阪神だけにある素晴らしいハンデである。

「しかも夏でも打つし」

「今年はな」

まだ悲観的なファンはここで今年は、と言つた。ここにも問題があつた。

一年目活躍した助っ人は研究されるのが常である。それで翌年からはそれを集所的に突かれて封じられる。それもプロではよくある話だ。極端な例では日本シリーズでそれが行われる。とにかくそれで潰れる助っ人が実に多いのである。

「来年はどうかな」

「来年か」

「あかんかも知れんで」

彼等はそれを心から心配していた。

## 第二章

「来年次第やな」

「そうか」

この年はそれで終わった。三割こそ達しなかったがホームランは三十本を越え勝負強かったのでそれが評価されて残留となった。そうして勝負と言われた次の年になった。

やはり五月までは調子が悪い。本人の言う通り。

「ほなこっからや」

「どうなるかな」

ファンだけでなくチームの上層部もどうかと見ていた。彼等はここでこのバースという助っ人を見極めるつもりであった。どうなのか、正念場であった。

ところがだ。去年より打つのだ。さらに勝負強くなって。皆またしても驚かされた。

「これは流石に」

「予想せんかったか」

「ああ、全然や」

口々にそう言われた。

「何か秘密あるんかな」

「どやろ」

秘密はあった。彼はただの助っ人ではなかったのだ。

日本の野球を必死に学んでいた。相手ピッチャーの癖も積極的に勉強していた。そうして日本の野球選手になっていたのだ。大リーガーであったが彼は日本の野球選手になっていたのだ。それも彼の必死の努力の賜物であった。

それだけではなかった。チームメイト達とも交流を深めていた。そうした意味で彼は阪神の選手にもなっていたのだ。

「またやろっ」

「将棋やな」

「そうだよ」

チームメイト達と将棋をさすのが好きだった。しかもかなり強かった。しかも公の場では話すことはなかったが日本語も理解していたのだ。

そうして阪神の選手になると。彼にとって一大転機が訪れた。

当時の阪神の看板選手は掛布雅之であった。彼は阪神の主砲であり名サードであった。打つだけでなくその守備でも評判の選手だった。

彼は甲子園球場を知っていた。だからこそ活躍できたのだがその彼がバースに対して教えることがあった。それこそがバースを変えたのである。

「ええか、バース」

彼はチームメイトに親しげに声をかける。スター選手だが決して飾らなく助っ人の彼に声をかけるのは彼のそうした人柄故であった。

「甲子園は波風があるな」

「うん」

バースはその言葉に頷く。その通りである。

「それを使っんや」

「それを？」

「そうや。この球場は風が強い」

そこを強調する。今甲子園は試合もなくいるのは阪神の選手達だけである。だからこそ掛布も気兼ねなくバースに話すことができるのである。

「それに乗せる」

「風にボールを乗せるんだな」

「そういうことや。力だけやったらこの甲子園は中々ホームランにならないのや」

伝統的に阪神というチームはピッチャーのチームである。ダイナマイト打線は実は短期間でしかなく実際は非常に長い間若林、小山、

江夏、村山とピッチャーに支えられた球団であつた。彼等は打線の援護は期待できないのはわかつているから決死の顔で相手チームに挑んでいた。甲子園のマウンドには今も彼等の血潮が滲み付いているのである。

だが今ベースも掛布もそのマウンドは見えてはいない。二人が見ているのは甲子園の風であつた。阪神の風であつた。

「つまりや」

掛布は手にしているバットを構える。そうしてベースに告げた。

「流すんや」

「流すのか」

「そう、風に合わせてな」

掛布が言つのはそれであつた。

「時と場合に応じて流し打ちにしたり広角打法でいく。それだけで全然違う」

「そうだったのか。じゃあ僕や掛布は」

二人共左バッターである。ここも重要であつた。

「そうや。レフトを狙うことも重要やで」

「うつむ、そうだったのか」

ベースはそれを聞いてあらためてレフトスタンドを見る。今はそこから右に風が流れている。この場合は。



### 第三章

「流せばいいんだな」

「そういうことや。わかってるやないか」

「そう言つてバースに対して微笑んでみせた。」

「それがわかつたらファールも減るし」

「ヒットもホームランも増える」

「今のうちは打つて勝つチームや」

この時はそうだった。例外的に投手陣が今一つ頼りにならない状況だったのである。

「だからな。打つんや」

「わかつた、掛布」

バースは彼の言葉に大きく頷いた。

「僕達でやるか」

「優勝か？」

「うん、阪神はずっと優勝してないんだつたな」

「そうやな。そういえばな」

掛布はバースの言葉に思い出したように言つた。そうすると言葉がしみじみとなるのであつた。

「二十一年やからなあ」

「長いな、本当に」

バースはその二十一年という言葉に途方もないものを感じていた。言葉でなら一言である。しかしそこにあるものは途方もなく長いものであるのだ。

「それは」

「チャンスもあつたけれど結局はあかんかつた」

昭和四十八年はあまりにも有名である。最終戦甲子園出よりによつて巨人に対して惨敗して優勝を逃した。これに激怒したファンが大暴れしたというのは二十一世紀まで伝わっている。

「どうしてもな」

「けれど今度こそ優勝したい」

バースは言う。

「僕達が打って」

「そやな。何かわしも本気になってきたわ」

バースの言葉を聞くうちに掛布もその気になってきた。今までは実際のところ優勝できるとは思っていなかったのだ。ところが。バースと話をしているうちにそれが変わってきたのである。これも全てバースのおかげであった。

「じゃあやるか」

「やろう、皆で」

バースはにこりと笑って言う。髭だらけの顔でその体格のせいか実際よりも大きく見える。その姿での笑みだが彼の笑みは不思議と人を惹きつけるものがあるのだ。

「優勝を」

「そやな」

彼等はこの時優勝を誓った。甲子園の風に。それを誓わせたのはバースであり阪神の選手であった。彼は何もかも阪神の選手になっていたのだ。

「なあバース」

そのバースにいつも親しく声をかけるのは阪神の中においてとりわけ阪神を愛している男川藤幸三であった。阪神の誇る好漢であり代打の切り札である。

「今日は何処行くんや？」

「いい飲み場所をまた紹介してくれるんだね」

「その通りや。わしはそういうのは何でも知つとるからな」

その人なつつこい笑みでバースに言う。四角くいかつい顔立ちで風を切って歩いているのだがそれでもその姿には妙な粋と格好よさがあるのである。それが川藤という男なのだ。

「そやな、神戸牛でも食いに行くか」

「いいね、それ」

バー스는神戸牛と聞いて笑顔になる。彼の大好物なのだ。

「じゃあ焼肉なんだね」

「そや、ステーキは高いからな」

この時代はステーキはまだ結構な値段がした。もっとも今安くなつたのはその神戸牛が出回っているからでなく輸入肉のせいであるが。

「それを食いに行こうか」

「川藤はそういうのを色々と知っているんだね。特に甲子園の周りで」

「ここがわしの家みたいなもんやからな」

そうバー스에応えて言う。

「そら色々と知つとるわ」

「ここが全部川藤の家なんだ」

「そういうもんやつちゅうこつちや」

またバー스에告げる。

「阪神が好きやから。色々知ることができたんや」

「阪神が好きだから」

「バー스も阪神好きやろ」

ここで不意にバー스에尋ねてきた。

「このチームが」

「うん」

そしてバー스는川藤のその問いに素直に答えるのであった。ストレートにはストレートといった感じであった。

「球場もいいしそれに」

「それに？ファンか」

「うん、彼等が一番好きだよ」

そう川藤に答えるのであった。

「あの凄い応援が。あんなのはアメリカにもないよ」

「そやろな。ここのファンは特別や」

川藤はバースのその言葉に目を細めさせた。彼が何よりもわかっていることだからだ。

「だからわしはここにずっといたい」

「ずっとなんだね」

「今まで色々見てきたで。けれどその中で」

またバースを見る。目がさらに温かくなっていた。

「御前は完全に阪神の選手になってるな」

「僕は阪神の選手だけれど」

川藤の今の言葉に少しキョトンとした顔になった。

「もう。それなの？」

「ちやうちやう、わしが言うのは本当の意味でや」

また温かい声でバースに言うのだった。

「バースはほんまの阪神の選手や。もう助っ人やあらへん」

こうまで言う。助っ人はあくまで助っ人、だがバースは阪神の選手になっていると。そうバースに対して述べたのである。

「御前巨人をやつつけるとするやろ。どうする？」

「それは決まっているよ」

バースは何を今更といった顔で彼に応えた。

「真っ先に行ってやつつけるよ。巨人だけはね」

「そういうことや」

川藤は今の言葉に大いに頷くのであった。彼が言いたいのはそれなのだ。

「巨人をやつつけるのは阪神にとって永遠の仕事や」

「そうだね」

これは今でも変わることがない。関西では巨人ファンには一言で言うところ人権がない。甲子園の一塁側で巨人を応援するということは死を意味する。

「そこで真っ先に行くのが阪神の選手なんや」

「そういうことだったんだ」

「バース、御前がいてくれてええわ」

川藤はまた温かい目になった。そうしてまたバーズに語る。

「御前と一緒に最高の酒が飲みたいな」

「じゃあ今からだね」

「今からだとちやうで」

これが川藤の本音であつた。

「これからも。それからもや」

「僕も川藤と一緒に飲みたいよ」

バーズもそれに応えて言うのだつた。

## 第四章

「ずっとね」

「アメリカ行った時は牧場でやな」

「バスがアメリカに牧場を持つているのは有名な話であった。彼はそこでも有名でよく阪神ファンの間では愛されて言われてきたことである。」

「飲もうで」

「川藤と二人でね。その時はステーキでね」

「楽しみにしてるで。ほな今は」

「焼肉でね」

「がんがんいくで」

こんな話をするのがいつもであった。彼は完全に阪神の中に入っていた。その彼が三年目に奇跡を起こすのであった。

三番ファーストに入る。彼はこのシーズン素晴らしい活躍をした。打った！

「また打った！」

阪神ファンだけでなく日本中が彼に注目した。

「またバスが打って勝った！」

「今日もか！」

巨人ファンも驚くしかなかった。甲子園では連日連夜お祭り騒ぎで阪神ファンの歓声が止むことはなかった。

「また打った」

「しかもや」

誰もが言う。この時の阪神に。

「あいつに続いて皆打ちよるわ」

「掛布や岡田だけやないな」

「ああ、皆や」

伝説のクリーンアップだけではなかった。真弓明信も打てば平田

満も打つ。それでいて阪神は隠れて守備も小技も長けていた。しかし何と言っても主役は彼だったのだ。

「ベースや」

「右に左に打つわ」

掛布に伝授されたその流し打ちと広角打法を上手く使っていた。

そうして甲子園の風に合わせてホームランを打っていく。まさに彼は無敵であった。

そんな彼を見て。ファン達は言うのであった。

「神様や」

「仏様や」

と。何時しか彼は崇拜さえされていた。これも阪神ファンの熱狂故であった。

「神様仏様」

「ベース様やな」

「ええ呼び方やないか」

ファン達はその呼び方に満足した。かつて西鉄で大エースであった鉄腕稲尾和久がそう呼ばれていた。ベースはその域にまで達していたのである。

「それにこのままいつたら」

「ああ、ひよつとしたら」

彼等は上機嫌で言い合う。

「優勝できるで」

「それもぶつちぎりや」

今まで二十一年間なかったことが。達成されようとしている。優勝は阪神にはないと思われていた。それなのにその果てしない夢が彼によって果たされようとしているのだ。ファン達はその夢を与えてくれようとしているベースを愛さずにはいらなかった。

「ベースかつとばせベース」

そのベースの歌だ。

「ライトヘレフトヘホームラン」

その言葉通りバースはライトにレフトにホームランを打ちまくる。バースが打ち阪神に勝利をもたらす。それがこのシーズンであった。夏もそのまま独走し遂に秋には。バースが、掛布が、岡田がバックスクリーンに巨人戦で放った三連発のアーチで巨人に引導を渡したのが阪神のこのシーズンを決定付けていた。阪神はこのまま独走していたのだった。

「もうすぐや」

「もうすぐやで」

彼等は口々に言い合う。

「優勝や」

「そして相手は」

パリーグの覇者は。もう見えていた。

「西武や」

「あそこしかないで」

当時の西武ライオンズは黄金時代の中にあつた。西武の黄金時代は非常に長いものであつたがこのシーズンはその中でも特別なものであつた。それにはやはり阪神が関係していた。

「このままだと間違いない」

西武の監督である広岡達郎は言つのだつた。

「セリーグは阪神だ」

「阪神ですか」

「勢いが違う」

そう選手やスタッフ達にも言つのである。冷静な、いつもの澄ました顔で。

「ならば今回注意しなければならないことがある」

「打線ですか？」

「いや、それは大したことはない」

看板であるダイナマイト打線に対して広岡は特に思うことはなかったのだ。

「打線は水物だからな」



「まあそうですね」

「打線は確かに」

これは野球においてはよく言われることである。打線が常に好調とは限らない。むしろ大事なのは守備でありピッチャーなのだと。阪神は守備はともかくピッチャーに関しては不安があった。これに関しては西武の方が勝っていたのである。

「ただ、バースは別だ」

「バースですか」

「彼だけは特別だ」

こう評するのであった。

「彼の封じ方はない」

「ないですか」

「あそこまでのバッターは。そうだな」

ここで広岡は自分の記憶を辿る。そうして出るバッターは。

「長嶋君か王君だけだな」

彼は現役時代は巨人のショートであった。華麗な守備で知られていた。なおこの時の阪神のショートは当時阪神の監督だった吉田義男である。牛若丸と呼ばれ完璧なまでの守備を誇っていた。つまり広岡とはライバルだったのである。その広岡がかつての同僚であり後輩でもあるこの二人を名前に出してきたのだ。

## 第五章

「あの二人に匹敵する」

「そこまですか」

「彼だけは別だからな。しかし」

「しかし？」

「守備は大したことがないだろう」

それが広岡のバースに対する評価であつた。

「恐れることはない。守れない男はそれだけで穴になる」

「そうですね」

「それは」

パリーグの人間だからこわかることであつた。パリーグには指名打者制度がある。これは大抵打つのはいいが守れない選手になるものである。それはパリーグの人間ならば誰でも知っていることである。

「そこを突けばいい。それだけだ」

「では阪神には」

「勝てる」

平然として答えた。

「間違いなくな。ただ」

「まだ何かありますか」

「応援には注意することだ」

今度出してきたのは阪神の応援に関してだ。

「それですか」

「あのチームのファンは特別だ、昔からな」

巨人の人間であつたからこれもよく知っていた。

「パリーグの、いやどの球団の比でもない

「それは知っていますけれど」

「それでも」

「いや、それは実際に見ないとわからないものだ」

広岡はそれを軽く見ようとする彼等を嗜めるのであった。

「凄いというものではないからな。だから」

「何かされるのですか？」

「ラジカセを用意しておいてくれ」

彼はそうスタッフに告げた。

「ラジカセを？」

「そうだ。それを練習中に大音量でかけてくれ」

こう頼んできた。

「六甲おろしをな。いいな」

「そこまでされますか」

「飲まれたら終わりだ」

彼は言う。

「阪神ファンにな。それも注意しておいてくれ」

「わかりました。それでは」

「うん。後はまあ」

ここで吉田の顔が脳裏に浮かんだ。そのうえでふと呟いた。

「吉田は私より慎重な男だが。何をしてくるかな」

彼はそれも警戒していたが一つだけ見落としているものがあつた。そしてその見落としていたことによって苦い顔をする破目になるのであった。

ペナントはもうあつという間であつた。呆気無く、しかし熱狂的に阪神の優勝に終わったのであつた。フィーバーとまで言われた宴はここで第一幕を終えた。

「よっしゃ、次は！」

「ライオン退治や！」

話は日本シリーズに移っていた。それしかなかった。

「けれど西武は強いで」

「しかも率いるのは広岡や」

阪神ファンの多くは彼を巨人と同じと見ていた。巨人のショート

だつたからだ。

「手強いで」

「勝てるか!？」

「勝つに決まつてるやろが」

無意味なまでに強気になるのも阪神ファンである。この時がそうであつた。

「何でもここまで来て負けるねん」

「そやろか」

「大丈夫やろか」

どんな負け方でも有り得るのがこのチームだ。どんな勝ち方も負け方も華麗なまでに絵になる。それはこの時からである。こんなチームは阪神だけだ。

「勝てる。何しろこつちには」

「バース様がおられるか」

「バース様に不可能はないわ」

既に彼はこうまで言われていたのだ。

「だから安心せい」

「勝てるんやな」

「わしは信じとる」

阪神ではなくバースである。この場合は。

「バース様をな。ほな」

「ほな？」

「勝利祈願や。散髪屋行つて来る」

「散髪屋か」

「ああ、頭虎刈りにして来るわ」

ファンの中には本当にこうする者までいた。

「それで阪神の日本一を見るんや」

「ほなわしもやろか」

動く人間がいれば乗る人間もいる。今回もそうであつた。  
「ほなわしは車や」

「縦縞にするんか」

「そうや、あの阪神の縦縞や」

猛虎模様の車まで出る。まさにフィーバーであった。

「それで日本一を祝おうな」

「あの憎き西武に勝って」

「阪神の時代の再来や」

実際のところ黄金時代と言えるものはまあ終戦直後のダイナマイ  
ト打線の頃位だと言われているのだが。何故か阪神ファンというも  
のは時空を超えてものを考えるとところもあるのである。

## 第六章

「これからな」

「よしっ」

皆の言葉に気合が入った。

「バース様の御活躍を祈願して」

「神社にもお寺にも参って」

「教会にもな」

皆戦う前からはしゃいでいた。まだ勝負もはじまっていないというのに日本一になった時のことばかりを考えている。阪神が日本を覆っていた。その熱狂の渦がいよいよ実際に勝負になるうとしていた。

広岡は思っていた。まず相手はバースが鍵だ。そのバースの弱点はもうわかってしていると。確信さえしていた。

「西武球場での一戦二戦だが」

彼は試合前のミーティングにおいて選手達に対して話していた。

既に阪神ファンは西武球場を占拠してその歓声がミーティングルームまで聞こえている。広岡はそれを背に話していた。

「指名打者はバースですか」

「バースですか」

「そうだ」

左の若手工藤公康の言葉に応えた。

「まず確実だ。バースの守備は阪神の弱点だ」

こうまで断言する。

「それを隠す為にだ。まずこうしてくるだろうな」

「では監督」

それを聞いて選手の一人が広岡に対して言う。

「今回はそれでは」

「第二戦までは一勝でいい」

はつきりとその選手に告げた。

「そしてバースが守る甲子園で」

「バースを徹底的に攻めますか」

「その通りだ。何も打つばかりが野球ではない」

広岡はそれがはつきりとわかっていた。今現在の巨人のように打つだけで野球が出来ると考えているような粗雑極まりない幼稚で浅はかな男ではない。そうしたことも完全にわかっているのだ。

「守備もだ。そして我々は」

「そこを攻めると」

「阪神の守備は決して侮れるものではない」

広岡はこれもわかっていた。彼は相手を侮る男ではない。多分にプライドが高いがそれでも知将を自認するだけはある。阪神の守備力も冷静に分析していたのだ。

「およそ穴はない」

「ありませんか」

「あの広い甲子園だ」

今度は甲子園球場も指摘する。その広い球場を。

「そこで勝ち抜くには打つだけではないのも事実だ。だからこそ」

「数少ない穴を攻めると」

「バースは確かに鍵だ」

広岡はこのシリーズにおいて絶対の存在感を示している彼の名をまた出す。

「しかしそれは我々にも言えることだ。それを知らしめるぞ」

「はい」

「それでは」

「日本一になるのは我々だ」

広岡は表情を全く変えずに一言述べた。彼らしく。

「いいな、それだけは絶対の自信を持っている」

「阪神が何だ、ですか」

「ピッチャーについては何の問題もない」

この時の阪神投手陣について彼は完全に安心していた。そう思わせるだけのものが当時の阪神投手陣にあったのもまた事実である。

「何のな。だからこそ」

「俺達が日本一ですか」

「そうだ。あとは敵将だが」

意外な程顧みられていない敵将吉田義男についても言う。

「彼は私より慎重だ」

「監督よりもですか」

「危険な橋は渡らない。だからこそ安心でもある」

それだけに手の内を読んでいるとまで言うのであった。

「そういうことだ。それでは」

「ええ」

「行きましょう、日本一の胸上げに」

「うん」

広岡はまたしても静かに頷いた。そうして彼は痛風でどうにも動きにくい身体で戦場に向かう。彼の痛風についてもまあ色々と言われているがこれもまた彼の意外な人間臭さの部分でもある。

阪神と西武は西武球場で戦闘に入った。観客席は見渡す限り縦縞である。六甲卸しが鳴り響いている。

「おいおい、西武ファンは何処なんだよ！」

「甲子園かあそこは！」

テレビを見て思わず突っ込む者すらいた。そこはまさに阪神の世界であった。

「バースもおるで！」

「おお、おったおった！」

誰もが三塁ベンチにいるバースを見る。それは西武ナインも同じであった。

「大きいな」

「ああ、二メートルはあるな」

実際にはそこまで大きくはないバースを見て口々に言う。それだ



け圧倒的な存在感とプレッシャーが彼にあるということであった。

「あんなのの相手か」

「だから守備だろ」

ここで誰かがそつと囁く。

「下手に見て気を吞まれるな」

「そうだな」

そう話し合つてまずはバースからのプレッシャーを避ける。そうしてスターティングメンバーの発表が行われる。

「えっ!？」

「嘘だろ!？」

これに驚いたのは広岡や西武ナインではなかった。阪神ファン達ですらそうであった。

「バース指名打者ちゃうで」

「弘田がなつとるやんけ」

ロッテから阪神に移籍してきていた小柄な外野手である。業師として知られている。守備にも定評がありセンターを守ることが多い。

## 第七章

「何で弘田が」

「よっさん何考えてるねん」

よっさんとは吉田の通称の一つである。ファン達でさえ吉田の今の采配には目を丸くさせていたのだった。

「しょうおへんなあ」

その吉田はこう言って笑うだけである。しかしここで吉田を知る古いファンや記者達はベンチのそんな吉田を見て囁くのであった。

「あれは狙ってたよな」

「そやな」

彼等は知っていたのだ。吉田がそんな仕草をする時は必ず仕込んでいたのだと。麻雀で何かをする時はいつもそうなのも知っている。だから今の彼を見て囁き合うのであった。

「さて、バースが守りやが」

「それがどうなるかやな」

「わからないな、これは」

広岡は広岡で。ボードの阪神側のメンバーを見てまた言った。

「バースを守らせるのか。これは一体」

だがその試合ではわからなかった。この試合でわかったのはやはり打席でのバースは神に他ならないということだけであった。

工藤が投げていた。彼は速球とカーブを主体に投球を組み立てる。その彼の投げた高めの速球をバースが派手に空振りしたのであった。

「今のを空振りか」

工藤はバースのその空振りを見て目を鋭くさせた。実は彼は頭脳派である。コンディションの調整にも投球術にも細心の注意を払う。その彼がバースの空振りを見て思ったのだ。

「ストレートだな」

当然ながら自分の球種もわかっている。工藤の球種は決して多く

はない。ストレートとカーブの他は精々スライダーがある程度だ。その中でやはり武器と言えばカーブなのだ。その大きく縦に落ちるカーブだ。

「よし、それなら」

彼はその切り札を使うことにした。バースの裏をかくつもりだった。このカーブで打ち取る、そう決めて投げたそのカーブであったが。

打たれた。バースのバットが一閃したその次の瞬間にはボールはスタンドに入っていた。これは工藤にとっては思いも寄らないことであった。

「今のが打たれた!？」

大きく弧を描きスタンドに入るバースのアーチ。それが阪神ファンの中に吸い込まれていく。それはまさしく勝利の証であった。

「読まれたな」

それを見た西武のヘッドコーチ森昌彦が呟いた。かつて巨人においてキャッチャーとして長い間グラウンドでの指揮を執ってきた男である。現役時代はその巧みなリードで知られていた。

「工藤は頭がいい」

彼もそれは把握していた。しかし。

「だがバースはそれの上をいく」

「上をか」

「はい」

広岡に対しても答える。

「完全に。これではどうしようもありません」

「そういえばバースはあれでかなりの知性派だったな」

広岡もそれは知っていた。しかしだ。

「だが。忘れていた」

「忘れていましたか」

「少なくとも工藤以上ではないと思っていた」

彼がそう思っていたのは理由がある。それは。

「パワーばかりを見ていた。研究していたがそれを忘れてしまっていた」

「私もです」

森もそれは同じであつた。彼等はバースのパワーにばかり気を取られてしまつていたのだ。頭腦のことも頭に入れていたつもりだったがそれをイメージの前に打ち消してしまつていたのだ。彼等もまたバースを見誤つてしまつていたのだ。

「手強い男だな」

「そうですね」

森は広岡のその言葉に頷いた。

「予想以上に」

「ですが守備についてはこうはいかないかと」

「そうだな。守りは嘘はつかない」

「そういうことです」

広岡も森も野球においては守備を最重要視する男だ。とりわけ森はそうである。西武の強さの秘密はまる守備力にあつた。これは有名な話である。同時に何故今の巨人がああまで無様なのか。答えはその逆だ。守備が悪いからだ。野球を知らないフロントは当然ながら守備力というものを理解できないのだ。だからである。

「機会があれば。仕掛けるぞ」

「わかりました」

この試合は結局バースのアーチが決定打となり阪神の勝利に終わった。問題は第二戦であつた。西武の野球はこの第二戦を重要視するものである。

彼等は阪神の隙を狙つていた。何時何処で仕掛けるか。まずは敵の攻撃力は度外視していた。それを見ると戦力を見誤るからだといふのがその理由である。

阪神の先発である池田親興は好投する。これは意外であつた。

「おいおい、池田やるやんけ」

「こらひよつとしたら」

完封なのでは、阪神ファンはこう思いはじめた。あまりいいとは言えない普段の彼だが今日は違っていた。中々頑張っていたのだ。それでもピンチは訪れる。三塁ランナーには俊足の秋山幸二、バッターボックスには球史に残る技巧派バッターである辻発彦がいた。そのうえ知将広岡である。何を仕掛けてくるかわからない状況であった。

「何してくるやろな、広岡は」

「そこまではわからんけれどこの場面は大きいで」

阪神ファン達は固唾を飲んで成り行きを見守る。西武球場は緊張に包まれていた。

「さて、その機会が来たな」

広岡は今の状況を心の中でほくそ笑んでいた。彼にとってはシリーズの流れを決定付ける絶好の場面であった。

「ここでの一点は大きいぞ」

## 第八章

「そうですね」

森が広岡のその言葉に頷く。

「ここでの一点は試合を決めるだけでなく」

「シリーズの流れも決めかねない」

彼はまた言う。

「だからこそだ。ここは攻めるぞ」

「それでは」

「そうだ。丁度バッターボックスにいるのは辻だ」

これが非常に大きかった。彼の得意とするのは流し打ちだ。しかしそれは。

「流し打ちは止めるか」

「バースは攻めない」と

「違う。岡田を攻めないのだ」

それであつた。彼は岡田の守備を知っていた。決して足は速くないがその守備は堅実で定評がある。その彼の守備を警戒しているのである。

「ここではな」

「しかしそうなると」

「攻めるところがないか」

「はい、内野も外野も」

とにかくこの時の阪神の守備は安定していた。中々攻めにくいものがある。ピッチャーはよくないが守備はよかった。これが意外と大きかったのだ。

「攻められません」

「何も打つのは守備だけではない」

しかし広岡はここで言うのであつた。

「何もな」

「それではここは」

「転がす」

即ちスクイズであつた。日本シリーズでは伝説的名将である西本幸雄の二回のスクイズがあまりにも有名であるが広岡がここで選択したのはそのスクイズであつたのだ。

「しかも一塁側に」

「それで攻めますか」

「これならば。阪神を潰せる」

広岡はそのスクイズで阪神を一気に潰すつもりだつたのだ。一回のスクイズで。そしてその攻撃対象は。

「バースだ」

それはもう決まっていた。

「バースをそれで攻める、いいな」

「はい、それでは」

「これでシリーズは決まった」

広岡は勝利を確信していた。だがそれも顔には出さずにサインを出すだけであつた。

「これでな」

「阪神もこれで終わりですか」

「打線だけのチームでないことはわかっている」

それは容易にわかる。広岡とて伊達に知将と呼ばれているわけではないのだ。

「しかし。その穴を攻めれば」

「そのチームはそれで陥ちる」

「今がその時だ。さて」

サインを出し終えた。後は見守るだけであつた。

「これで決まるな」

「我々の優勝が」

彼等はそう思っていた。最早勝つたものと思っていた。だが。三塁側ベンチの吉田は今も何か妙な含み笑いを浮かべていた。広岡も

森もそれには気付かなかった。

池田が投げる。その瞬間に辻はバントの構えを取り秋山が走る。

阪神ファンはそれを見てあっと息を呑んだ。

「スクイズ!？」

「そうきよったか!」

殆どの者はまさかと思っていた。辻はバントを構えながら一瞬だけ一塁側を見た。攻撃目標はそこであった。

「そこだ!」

そこに転がす。それで終わりだった。その筈だった。

しかし。そうはならなかった。バースは彼等の予想より素早く動いていた。そうしてそれでバントで転がったボールを瞬く間に素手で掴んだのであった。

「なっ!？」

「速い!」

広岡も森もこれには驚きを隠せない。まさかの動きだった。

バースは彼等が驚く間にもボールを処理する。そうしてホームに投げ。広岡の作戦は失敗に終わったのだった。



## 第九章

歓声に包まれる西武球場。しかしそれは西武ファンのものではなく阪神ファンのものであった。思いも寄らぬバースのファインプレーであった。

「よっしゃああああ！」

「バースがやったで！」

「そうだ、バースだ」

広岡はその歓声の中で呟いた。

「そのバースを攻めたのだから」

「まさか」

森も驚きを隠せない。彼等は今で勝てると思っていた。阪神の弱点であるバースの守備を攻めたのだ。だがそのバースの守備により失敗した。彼等にとっては信じられないことであった。

「こうなるとはな」

「どうやら。我々の予想以上だったようで」

「そうか。吉田は」

ようやくわかった。何故あえてバースを守備につかせたか。それは吉田がバースの守備を知っていたからだ。それに他ならなかった。知っていてやったのか。何もかも」

「我々の作戦負けですか」

「そうだ。いや」

広岡は言おうとしたところで自分の言葉を訂正する。そうして言うのは。

「バースに敗れた」

「バースにですか」

「そうだ。まさか守備まで見事だったとは」

それが広岡にとっては思わぬことだった。今更言ってもはじまらないにしろ。

「この失敗は大きいな」

「シリーズは。これで」

「少なくとも阪神の流れが決定的になった」

彼もそれを認めるしかなかった。まだ歓声をあげる阪神ファンの声がそれをさらに教え込んでいた。彼の心の中に。

「これでな」

「しかし。敵を褒めるようですが」

森は表情を変えずに広岡に言ってきた。

「何だ？」

「バースは素晴らしい選手です」

それを今言う。

「素晴らしい野球選手です」

「そうだな」

広岡も表情を変えずに森のその言葉に頷く。

「彼は助っ人ではない。そう」

そして言う言葉は。

「最高の野球選手だ。最高の阪神の選手だ」

「阪神のですか」

「そうだ。あれだけ阪神のユニフォームが似合う選手は今までいなかった」

これまで多くの阪神の選手を見てきた彼の言葉である。それだけに重みがあった。

「見事なまにな」

この試合も阪神の勝ちであった。そうして第六戦。阪神は西武球場において遂に日本一を決めた。所沢の寒風の中でバースは問われた。

「寒くなかったですか？」

「寒い？そんなのは全然感じなかったよ」

シリーズのMVPを受賞し歓喜の中での言葉であった。

「エキサイトしていたからね。半袖でも全然平気だったよ」

「それでこそバースや！」

「ホンマに神様や！」

その言葉に喜ぶ阪神ファン達であった。彼等は今バースという最高の野球選手を見てその素晴らしいプレイを堪能していたのだ。ランディ・バース。この名は永遠に残っている。最高の野球選手、最高の助っ人との声も高い。しかしある人は言う。彼こそは最高の阪神の選手だったと。少なくとも彼がいなくてはこのシーズンの阪神の日本一はなかった。そうして今も深く愛されている。これだけ愛されている阪神の選手は稀である。アメリカに帰ってもまだそうである。

「バースがあの時打ってな」

「あのバックスクリーンにな」

今でも甲子園球場で目を細めさせて語るファン達がいる。入団当初は不安視もされていたが今は違う。伝説として残っているのだ。

最高のタイガースプレイヤー

完

2007・11・26

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3699d/>

---

最高のタイガース = プレイヤー

2010年10月8日14時45分発行